

MR.BIG GEAR REVIEW

ニューアルバムのレコーディングで使用されたバンド機材を解説!



01

■Eric Martin

ボーカリストとしてだけでなく、バラードではアコースティック・ギターもプレイし、アンサンブルを華やかに彩るエリック・マーティン。彼がレコーディングで使用したのはヤマハCJ32だ(01)。トップにスプルース、サイド/バックにメイプルを使用した総単板仕様のジャンボ・ボディのモデルで、大きなサイズのボディが生み出す深みと重量感を備えたダイナミックで歯切れのよいサウンドと、全音域に渡ってバランスのいいパワフルな鳴りが特徴だ。

■Paul Gilbert

ミスター・ビッグのアルバム参加は、96年リリースの「HEY MAN」以来、14年ぶりとなったポール・ギルバート。今回、彼がメインで使用したのは、最新シグネチャー・モデルのファイアーマンだ。アイバニーズが70年代に発売していたオリジナル・モデル、アイスマンのボディ・シェイプを反転させ、1弦側にカッタウェイを施した鮮やかなアイデアによるファイアーマンは、完全限定で発売されて話題となった。レコーディングでは2本のファイアーマンを使い分けており、1本はPGM-FRM1として市販された3シングルコイルタイプPUのものだ(02)。ボディ、ネックにはコリーナが使用され、PUはディマジオ・ヴァーチャル・ウィンテージ・シリーズのエリア67が搭載されている。

もう1本のファイアーマンはハムバッカー仕様のPGM-FRM2を元に、LAでのパーティーで供された日本酒「菊水」が気に入り、その瓶のデザインをモチーフとしたユーモラスなルックスのモデルだ(02)(04)。ボトルの色をイメージした明るいブルーにフィニッシュされ、漢字で「菊水」と書かれているだけでなく、ラベルの朝日に雲がかかった意匠や赤い菊のマークをデザインに採り入れている。さらにコントロール・ノブに菊水のボトルキャップを取り付けているという凝った仕様のギターだ。PUはディマジオ・エア・クラシックが搭載され、ゴールド・パーツやブラックのバインディングが施されているのも特徴。

表紙などで掲載されている写真でポールが手にしているトランスルーセント・レッドのファイアーマンは、10年にリリースされたポールのソロアルバム「ファズ・ユニバース」のジャケットに写っているもので、「ホワット・イフ…」のレコーディングでは使用されなかったが、市販も検討されているニューモデルだ。注目ポイントはディマジオと共同開発された同社初のポールのシグネチャー・モデルPUとなる「インジェクター」インジェクターがフロントとリアに搭載されている点だ。これはPGM-FRM1にマウントされていたエリア'67よりも高出力で、全帯域にわたってバランスの取れたトーンを持ち、ヴァーチャル・ウィンテージ・テクノロジーによる



02



03